



クラーク室内管弦楽団

第48回 演奏会

夏の夜のコンサート

2019年8月28日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料

～・～・～・～・～・～・～

プログラム

J. ブラームス (1833-1897)

セレナード第1番 二長調 Op.11

F. シューベルト (1797-1828)

交響曲第7番 短調 D. 759 『未完成』

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ 011-706-2493 (農学研究院 曾根輝雄)

プログラムノート

西洋音楽発展の歴史の中で、「機会音楽」というものが大変重要な位置を占めています。すなわち、ある特定のイベントや式典、宴会、あるいは宗教的な集まりのために演奏されることを（唯一の）目的として作曲された音楽です。バッハは教会の専属のオルガニスト・作曲家として、その宗教行事のためにたくさんのオルガン曲やミサ曲を書きました。現在でも、恵まれた条件にあるキリスト教の教会では、その宗教行事のために新しいオルガン曲が作曲され続けているようです。たとえば、イギリス、グリニッジのクイーンメアリーコート教会は、もともと退役軍人が毎日礼拝をあげる場所として建てられたものですが、有名な観光地となっており、併設されているトリニティ音楽院の研究者たちによって作曲・演奏が続けられているそうです。モーツァルトも20代前半のザルツブルク時代には、教会のためにたくさんのオルガンソナタを書いています。また、王侯貴族の宴会にも音楽は欠かせないもので、雇われ音楽家として生活が比較的「安定した」期間が長かったハイドンも、領主のためにたくさんの音楽を書いていました。実力と人気のある作曲家は、そこから徐々に、雇い主のためだけではない音楽を書く機会も増えて行ったようです。ハイドンは雇い主エステルハージ家以外からの作曲の依頼も増え、出版社からの依頼などもされるようになります。晩年はロンドンに招待されます。モーツァルトもウィーンに出たからは、自分でチケット（前売り券）を売って行う演奏会を開くようになります。おりしも市民社会が広がっていく時代で、ベートーベンなどの音楽につながっていくわけです。

ブラームスはベートーベンの後の世代になりますが、若いころは領主の雇われ音楽家であった時期もあります。そうした貴族のための機会音楽の1つとして書かれたのが、ハイドン風の『セレナー第1番』です。20代の数年間、ドイツ中西部のデトモルトの領主に雇われていました。この都市はなんと20世紀に入るまでリッペ家が治める宮廷都市であったとのこと。最初は、1857年ころから室内楽用の小さな編成で数楽章が書かれ、次第に楽章を増やし、1858年に現在の6楽章になり、貴族の私的な集まり（つまり宴会）で演奏されていたようです。当時の習わしのおり、（現在のコンサートホールでの音楽会のように）みなが行儀よく座ってじっと音楽に耳を傾けるというものではありませんでした。基本的には食事や談笑のBGMです。そして、とても長〜い音楽です。「セレナー」とはもともと、夜に恋人や憧れの人の窓の外で、演奏される音楽がその元祖で、西洋人にとっては今でもそのようなイメージを喚起する言葉のようです。（北海道の冬にはできません。また、今、都会でも騒乱罪になる？）。本日の演奏もそのようなイメージで、のんびりとリラックスした気分で聞いていただければ、この音楽の趣旨にもあっているかと思えます。第1楽章は二長調のアレグロ、2分の2拍子で、明るく優美な軽やかさがあります。第2楽章は一転して二短調。ちょっとミステリアスな気分の3拍子で始まります。中間部は長調になり、すこし弾むような3拍子のダンス気分となります。第3楽章はアダージョのゆったりとした音楽。少し静かな夜の宴の様子でしょうか。第4楽章は、室内楽風のメヌエット。メヌエット1の間にメヌエット2がサンドイッチされた三部形式になっています。これもゆったりとした踊りの音楽でしょう。続く第5楽章は、スケルツォで、少し勢いのある3拍子の踊りです。最終の第6楽章は軽快な2拍子のロンド、二長調。典型的なソナタ形式となっています。途中、後年のブラームスを思わせるような畳みかけるような展開を見せる部分もありますが、全体としては大変分かりやすい音楽となっています（「演奏しやすい」とは別）。全体として、後のブラームスの交響曲や管弦楽曲のような、濃厚さや構成の複雑さはほとんどなく、よく言えばモーツァルト・ハイドン風の気軽に聞ける音楽、少し批判的に言うとやや冗長で単調になりがちな音楽、ということになりましょうか。貴族の宴の気分を想像しながら、ゆったりとお聞きいただければと思います。

「未完成交響曲」といえば、この2曲目のプログラム、シューベルトの『交響曲第7番短調D.759』（1822年）がその代表ですが、実際には、西洋音楽の世界に限っても、「未完成交響曲」（最初の構想通りに全ての楽章を完成できなかったもの）はいくつもあります。エルガーの交響曲第3番（依頼され、着手したものの、作曲者の死去により、スケッチのみが残された）、ボロディンの交響曲第3番（全4楽章で構想されたが、こちら作曲者の死去により、1楽章と3楽章のスケッチが残された）、ブルックナーの交響曲第9番（第1楽章〜第3楽章までは完成されていたが、第4楽章が作曲者の死去により未完）、マーラーの交響曲第10番（第1楽章のみが完成され、残りの楽章はスケッチのみで、作曲者の死去により未完）など。大変興味深いのは、上記の「未完成」作品はシューベルトのものを除きみな、作曲者の死去によって未完となっているのに対して、シューベルトは1822年の時点では健在で、その後、たくさんの他の曲を作曲し続けていますし、1826年には交響曲第8番「ザ・グレート」(D.944)をしっかりと完成させています。

なぜこのD.759は未完成なのかは謎のままで、諸説あるようです。25歳の時にグラーツ楽友協会から名誉ディプロマを授与されたシューベルトがその返礼として作曲したのがこの曲で、協会には第1楽章と第2楽章だけを送ったとされていることから、シューベルト自身は「これで完成」と考えていたとすることもできます。一方、第3楽章の書きかけのスケッチも残っているため、やはり残りの楽章も書こうとしたが書けなかった（書けなかった）という解釈も可能なようです。シューベルトを主人公とした1933年オーストリアの映画「未完成交響曲」の中には、この曲の第3楽章を作曲しようとピアノを弾き始めるが、「これじゃない！」と書いて作曲を投げ出すシーンがあります（フィクションですが）。もっとも、研究者によると、シューベルトが作品を最後まで完成させないことはしばしばあったようで、この場合も何か特別な深い理由があって未完に終わったわけではないと考えることもできそうです。単に飽きた、とかやる気がなくなったとか。よく言われる説としては、この美しい第1楽章と第2楽章に見合った、第3楽章（第4楽章）を書くことができなかったというものですが、真相は神のみぞ知るといえることでしょうか。もっとも、作品の成立過程や、未完である理由に関わらず、この曲がシューベルトの作品の中で、大変美しく完成度の高い音楽であることには変わりありません。哀愁を帯びた冒頭の主題などは日本人好みかもしれません。

札幌の8月下旬は、朝晩涼しく爽やかな季節です。セレナーでも「未完成」も楽しむのにはぴったりかも。

（メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡）